

令和6年度 アーツ前橋事業評価調書(1)

資料 2-(3)

基本事項	事業名	地域アートプロジェクト 滞在制作事業							
	事業1	アーティスト	マームとジプシー(取材)	期間	11/7-11/10	日数	4		
	事業2	アーティスト	マームとジプシー(撮影)	期間	2/4-2/6	日数	3		
	事業3	アーティスト	マームとジプシー(報告会)	期間	3月22日	日数	1		
	担当者	学芸:宮本武典、東美沙季 事務:石井令奈							
	目的・目標 (総括表)	アーツ前橋の「美術」と、前橋文学館の「文芸」の中間にある表現領域として、「演劇」作家による前橋市中市街地のリサーチと、その成果を基にした映像詩の現地制作を行い、従来の「地域アートプロジェクト」に新たな視点と手法の導入を試みる。また、制作物を通して、再開発が進む広瀬川河畔に点在する前橋空襲や近代製糸工場の記憶を語り継ぐ。							
	キーワード	前橋市中心市街地の歴史・記憶を語り継ぐ、演者不在の街演劇・映像詩・インスタレーション							
	他団体との連携 (共催、協力等)	高崎商科大学 川又彩夏、元市議会議員 岡正巳、ソポーター 松本勉、ワンダーフォーゲル 関隆行、建築家 木暮勇斗、前橋空襲の語り部 原田恒弘、上州文化ラボ / 安田倉庫管理者 村上雅記、あたご歴史研究会 田名網雅久、フリツツアートセンター 小見純一							
	参加作家	藤田貴大	青柳いづみ				藤沢ゆき		
	関連イベント・人数	マームとジプシー・藤田貴大／スライドショー《湧きあがってくる時間》 日時:令和7年3月22日[土]13:00～16:00(12:30開場 入場無料・要予約) 会場:前橋文学館3Fホール 参加者:44名、登壇者4名(藤田貴大、青柳いづみ、萩原朔美、宮本武典)、関係者7名							
① 投入 (支出) ・ ③ 結果 (収入)	印刷物等	チラシ							
	財務指標	収入(A) 別表から転載	支出(B) 別表から転載	収支比率 (A)/(B)	一人当たり コスト	収入内訳			
		予算	-	290,360 円	-	観覧料	文化庁	自治総他	
		決算見込	-	831,240 円	-	-	-	-	
		差額		540,880 円	-	-	-	-	
		予算/決算		286.3%	-	-	-	-	
② 内容 ・ 活動	[②内容] 事業の概要	事業の概要 (転記)	開館10周年記念展「ニューホライズン」で、百貨店スズランを舞台に大型インスタレーション《瞬く瞼のあいだに漂う》を現地制作・発表した演劇集団「マームとジプシー」を、地域アートプロジェクト作家として再招聘した。2024年度は前橋をテーマにした続編《Curtain Call》(2025年「ゴースト展」で発表)のための取材・制作を行い、その活動成果を共有する報告会(スライドショー)を、前橋文学館で実施した。						
	[②活動] 主な取組(手段) の結果 ・メディア等広報実績 ・新たな試み 関連イベント 助成 など	・広報戦略 ・新たな試み (転記)	先述の通り、「アーツ前橋」におけるアーツの展開を試みるため、美術家ではなく演劇作家を招聘した。また、前橋文学館と連携し、滞在制作の報告会「湧きあがってくる時間」を、同館のリーディングシアターで実施し、当館の観客層とはことなるコミュニティ(文芸・演劇)にアプローチした。						
	●指標 来館者反応 手ごたえ アンケート	広報実績 [新規掲載や 効果が大き かった媒体な ど、特別な案]	2025/3/23 上毛新聞に記事掲載「アーツ前橋の地域プロジェクト 作品写し活動報告」						
	新たな試 みの実績	本企画の戯曲制作は、戦災の体験者や近代製糸の研究者への聞き取り調査と、インタビューから提供された各種資料の分析を組み合わせて記述された。結果、戦中戦後の前橋の変遷について詳細な証言を得ることができ、その成果を翌2025年秋の展示《Curtain Call》(ゴースト展と同時開催)にまとめて地域社会に還元することができた。また、前橋文学館および広瀬川河畔エリアとの発展的連携として、同展示は文学館3Fのオープンギャラリーをはじめ、街なかの4つの会場で開催できた。							
	数値目標	指標1	目標	イベント回数:2回		実績	2回		
③ 結果	数値目標	指標2	目標	参加者数:30名		実績	42名		
			目標			実績			
		コミット人数(事業・イベント等参加者数・実績)				---			
	進捗管理 [スケジュール観]	Ⓐ概ね円滑に進んだ Ⓑ遅延気味であった(内容:)							

令和2年度 アーツ前橋事業評価調書(2)

事業名		地域アートプロジェクト 滞在制作事業					
(4) 成果	<p>[④成果] 期待に対する結果 ・観覧者層のターゲット ・ねらい</p>	観覧者層のターゲット(転記)	「マームとジブシー」は文芸・音楽・ファッショなど、他領域とのコラボレーションでも知られ、現代演劇で高い評価と人気を獲得している。本企画は、そうしたカルチャーシーンのフォロワーと、当館の開館以前から前橋に根ざしている「詩」と「演劇」のコミュニティへの接続を意識して組成した。	成果	2025年3月22日に前橋文学館リーディングシアターで実施したトーク&スライドショーでは、県内外から演劇ファンが集まっただけでなく、日頃から同館の活動に参加する詩のコミュニティなど、多様な地域・世代からの参加者が見られた。		
		ねらい1(転記)	① 演劇メソッドによる地域アートプロジェクトの可能性	成果	聞き書きによって収集した情報を、テキストや音声など用いた「物語」として提示することで、美術だけに偏らない幅広い文化愛好家にリーチできた。また、舞台美術の知見や役者の身体性を、美術館内やまちなかでのサイトスペシフィックな展示に応用することで、美術と演劇双方の表現の拡張につながることが確認できた。		
		ねらい2(転記)	② 文化拠点の連携(美術館と文学館をつなぐ)	成果	美術と文芸を橋渡しするプロジェクトとして演劇作家によるプロジェクトを組成した。2024年度は前橋文学館リーディングシアターの利用にとどめたが、翌年の2025年は3階オープンギャラリーで当館と連携した展示も行い、両館の観客が4つのシーンを求めて街をめぐる回遊性を生み出さない、プロジェクトのさらなる発展・深化につながった。		
		ねらい3(転記)		成果			
(5) 波及効果	個別評価 ※記入日を()内に入れてください ※概ね1年経過毎に再確認して修正	<1~6は、記入項目の例・無い場合は削除。独自の評価項目の設定可。記入日を記載> 上記「④成果」の他、本プロジェクトのリサーチと報告会《湧きあがってくる時間》の実施を通して、当館周辺の文化資源や歴史を継承し、語り継ぐための活動を行っている様々な団体や研究者とつながることができた。プロジェクトによってもたらされた場や人々との連帯は、翌年に実施した「マームとジブシー」の制作・発表はもちろん、当館によるアート事業を周辺地域に拡張していく上で貴重かつ重要なネットワーキングの契機となった。					
自己評価(担当者)	効率性 ①:(3) 事業が効率的だったといえるか	1.非常に良い 2.良い 3.普通 4.劣る	1.非常に良い 2.良い 3.普通 4.劣る	3.普通	4.劣る		
	合目的性 ②:(4) 事業の目的を達成したといえるか	1.非常に良い 2.良い 3.普通 4.劣る	1.非常に良い 2.良い 3.普通 4.劣る	2.良い	3.普通	4.劣る	
	事業の将来性 ②:(5) 館の事業に対し将来性があるか	1.非常に良い 2.良い 3.普通 4.劣る	1.非常に良い 2.良い 3.普通 4.劣る	2.良い	3.普通	4.劣る	
	社会的将来性 ③:(5) 社会への影響に将来性があるか	1.非常に良い 2.良い 3.普通 4.劣る	1.非常に良い 2.良い 3.普通 4.劣る	2.良い	3.普通	4.劣る	
	課題・改善点	2024年度は招聘作家の知名度と実力に対して「地域アートプロジェクト」にかけられる予算が限られたため、単年度ではなく3カ年に分散してプロジェクトを設計せざるを得なかった。そのため館外の市街地に実装できる作品規模も得られる波及効果も予算範囲内にとどまっている。当館としては地域での企画組成にどの程度のリソースを割くのか、開館理念に立ち戻ったミッションの整理が必要である。					
引継ぎ事項(特記事項)							
コメント・意見		館長 副館長	美術と文芸を橋渡しするプロジェクトとして演劇作家による2カ年目のプロジェクトであり、限られた予算の中で報告会として形にすることができた。会場も前橋文学館を活用するなど当館の可能性を広げるプロジェクトとして企画されている。今後は、地域アートプロジェクトをどのように位置づけ実施していくのか検討する必要がある。				
		運営評議会					